

## NEWS

## 京都市京セラ美術館ニュース



## 新装版「作家にきく」no.1

「京都市美術館ニュース」第14号（昭和33年）より連載していた「作家にきく」。装い新たに再スタートを切りました。初回は三代宮永東山です。

## 三代 宮永東山

1935（昭和10）年、二代東山の息子として京都に生まれる。本名、理吉。1958（昭和33）年京都市立美術大学彫刻科を卒業、専攻科に進み、辻晉堂、堀内正和らに学ぶ。行動美術展に陶彫を出品し、会員となる。1960（昭和35）年、専攻科を中退し、渡米。集団現代彫刻、ゼロの会を経て、1970（昭和45）年、走泥社に参加。1999（平成11）年、三代宮永東山を襲名。色化粧土を施した立体構成からシャープな斜線が特徴的な青白磁、さらに近年には吹墨による染付を行うなど常に彫刻としての造形性を確かめながら、伝統的な陶磁器の技法との融合を志向している。



## 京都市立美術大学の彫刻教育

いちばんショッキングだったのは、彫刻家の菊池一雄先生に教わると思って京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）へ入ったら、菊池一雄先生はもうおらへんくて、先生は辻晉堂先生と堀内正和先生やった。

その当時の彫刻教育いうたら、モデルを使つての模写彫刻といふのかな、模刻彫刻といふのかな、それからふつうは習う。骨格を考えながら、モデリングするといふのが普通だった。さらに自分が入った時分は、今までの木とか石とか石膏とか一つの決まった材料で作ると違って、いろんな種類の材料を、彫刻を作る素材として、学生に選択させるというやり方が主流になっていた。

でも辻さんらの教育は、針金での「立体構成」。針金を使って、三つなら三つの四角形を組み合わせて形を作る。真四角から始めて、だんだん複雑になって、いちばん最後には曲面や金網を使う。美術学校に行ってデッサンするとか鉛筆握ったりするとか思ったら、ペンチと針金を渡されてね、「三角形を作ってみろ」と。立体構成を針金でやるというのは美術教育の中でも初めての試みやったらしい。面白くない授業でね、本当に面白くなって（笑）。

だから1学年のときにね、ほとんど実材ってなぶってへんねん。2学年からは、今度は実材になる。前期は木彫、その次は石彫、鉄と、素材ごとによって。私はわりかた鉄という素材の彫刻に興味を持った。

## 初期の彫刻作品について

「ゼロの会」を作って、1960年が第1回展。京都市美術館の大陳列室を、8人のメンバーの作品だけで埋めた。これがものすごく反響を呼んだ。そのころから作品は、焼き物だけと違うた。鉄の作品とかね。鉄を打って作品を作って、またバラして、また作って。焼き物でもオブジェ的な作品というか。

それとちょうど同じ時期に、国立近代美術館京都分館（現・京都国

立近代美術館）が開館して「現代美術の動向展」（1964-、前身展は1963）が始まった。この時は陶器の作品も同時にやって。釉薬とかまったくかけてへんけど。全部登り窯で焼いてる。「動向展」の2回目（1965）に出したんは、磁器の作品やねん。このころ造形的な作品、オブジェ的な作品で磁器使う人ってのはなかったと思う。

## 陶の作品への意識と、周囲の理解との乖離

京都国立近代美術館の鈴木健二さんと内山武夫さん、乾由明さんから、「現代の陶芸」（1970、1971）と「現代工芸の鳥瞰展」（1973）で声がかかった。私のことを彫刻家として認めながらも、「陶器の展覧会に作品を出してくれ」と。その展覧会に出したら、彫刻の展覧会からは何もお呼びがかからなくなってしまった。いまだに私は、「陶芸家」と言われるのがいちばんかなわんと思う。「茶碗屋」やったらまだええけどね。自分の作品を工芸の枠だけで捉えられると困る、という気は今でもある。

焼き物の場合には先に形を考えて作るか、作りながら形を考えるか、どっちかやねんね。私の場合はイメージが先にある。行動美術協会をやめて走泥社に入ってから余計それを感じるようになって、それははっきりしとかんとあかんなど。美術っていうのは作りたいもののイメージが先にある。私はそう思う。素材に作りたいものを合わせる工芸の姿勢からは、私はなるべく離れたい。

わりかた年齢を重ねてからの自分の作品というのは、基本的な形は先にあねん。三角形でも、立方体でも。その基本的な形に、附属的な形を付けていくねん。そういうやり方をやっていくうちに、だんだん辻さんと堀内さんの考え方がわかるようになってきた。土でしか作らへんようになって、「もっと形つちゅうものを考えなあかん」と思ってから初めて、「あんときに習った立体構成つちゅうのはこういうことやったんや」と。ずいぶん後になってから理解できるようになったね。

（聞き手：京都市美術館学芸課／構成：櫻井拓）

\*新装版「作家にきく」は今後公式サイトにも掲載予定です。

## 今後の展覧会

- 「コレクションルーム春期」3.20-6.20
- 「コレクションルーム夏期」6.26-9.26
- 「国立ベルリン・エジプト博物館所蔵 古代エジプト展 天地創造の神話」4.17-6.27
- 「フランソワ・ポンポン展～動物を愛した彫刻家」7.10-9.5
- 「京都市京セラ美術館1周年記念展 上村松園展」7.17-9.12
- 「25周年記念 るろうに剣心展」4.23-6.6
- 「THE ドラえもん展 KYOTO」2021.7.10-9.5
- 「ザ・トライアングル 湊茉莉」3.16-6.13
- 「ザ・トライアングル 宮木亜葉」6.29-10.11

## 編集後記

この度のリニューアルオープンに際して、美術館ニュースを「京都市京セラ美術館ニュース」としてデザインを一新して再スタートいたしました。「京都市美術館ニュース」は1957（昭和32）年11月16日に創刊いたしました。創刊時より、美術普及の一端として、展覧会の紹介記事や所蔵品の紹介にとどまらず、作家へのインタビューや回顧談、市内の画廊で行われている展覧会の批評などを掲載し、京都の美術の動向をも捉えてきました。今後もこの方針を維持するため、号数は「京都市美術館ニュース」の号数を引き継いだ通番、216号から開始したいと思います。今後ともよろしく願いいたします。（京都市美術館学芸課）

## 『美術館ニュース』リニューアルに際して

青木 淳 | 当館館長



Photo: Maetani Kai

昨年2020年、京都市美術館は、大規模な再生工事を経て、通称「京都市京セラ美術館」としてリニューアル・オープンしました。工事前の総床面積がおよそ12,000㎡だったのが約19,500㎡と、6割ほど大きくなった勘定になります。面積だけでなく、もとの姿を残しながらも、その内容、様子も、大きく変わりました。あわせて、1957年の創刊以来ずっと続けてきたこの美術館ニュースも、装い新たに再出発することになりました。

今回の美術館リニューアルでは、長年の悲願であったコレクション・ルームが設けられました。美術館の核は、人類共通の財産である美術作品の収集、保存、展示という役割にあります。それは創建時にも十分に理解されていたことでした。「時々展覧するにあらずして常設的のものとするつもりなり」と、構想時に京都市長だった土岐嘉平さんが話されています。開館後の市長、大森吉五郎さんもまた、「京都へ行けばいつでも誰かの名作が見られるというようにしたいと思う」と語っています。1933年という早い時期でしたが、当館は、優れた作品を蒐集して、そのコレクションを見てもらうという、西欧における「ミュージアム」の定義通りの空間として構想されていたのです。にもかかわらず、当館は、諸般の理由から、以来90年近い時の流れのなか、所蔵品の常設展示空間を持つことはありませんでした。それが今回のリニューアルでようやく、原点に回帰できたということになります。

作品を収集するには、そのための方針が必要です。リニューアル工事で休館中だった2018年に、それが明文化されました。「日本文化の創造と継承の中心地である京都における近代以降の美術を展望できる総合的なコレクションを、世界的な視野に立って形成するために必要な作家の作品及び資料を計画的に継続して収集する。」ふつう「近代」は、明治以降を指しています。しかし、ここで言う近代はもう少し広く、明治期以降の美術形成に影響を与えた江戸期も含まれます。そして、京都でのそんな美術の流れを「総合的」に展望できるようにする。偏らず、穴がないように、あまねく収集するというわけです。しかも「世界的な視野に立って」。海外からの京都の美術への影響、京都からの海外への影響も、そこに加えます。現在のところ、所蔵品は3,700点余り。まだまだ収集は道半ばというところですが、毎年度、予算化し、所蔵品のさらなる充実を図っています。今後、このニュースでは、そうした当館のコレクションも紹介していきます。



Photo: Koroda Takeru

1933年に創建された当館はもともと、同時代作家の作品を展示することを想定してつくられました。展示室の幅は、当時の作品の鑑賞のため、大きすぎず、小さすぎず、ぴったりの寸法の引きがもてるよう、一律約8mで設計されました。例外は、中央の「大陳列室」で、主に彫刻作品を展示するためだったでしょう、約22m×約29mの平面形に、15mを超える天井高をもった大きな空間でした。

今回のリニューアルでは、初心にかえて、現代における同時代作家のための展示室を新たに設けることとしました。それが「東山キューブ」と呼ばれる空間で、1972年に川崎清さんの設計でつくられた北西の収蔵庫棟に替わってつくられた新館の1階にあります。約35m×約29mのワンルームの展示室です。開館からの長い時間のなかで、美術作品は多様化してきました。巨大な作品、微小な作品、空間そのものを作品とするもの、それまでの美術の概念を壊そうとする作品、映像、パフォーマンスなどなど。そこで、この大きなワンルームを、「可動展示壁パネル」の位置を組み替え、展覧会の趣旨に合わせた大きさとプロポーションの部屋に、自由に区切ってつかうことにしました。

同時代の作家のための空間としてもうひとつ、「ザ・トライアングル」という空間もできました。美術系大学が多い京都です。この地には、京都という都市とかかわる、これから活動を広げていこう作家たちが、数多くいます。まだあまり知られていない作家から、新進気鋭の作家まで、京都ゆかりの現代美術作家を選んで、継続的に皆さんに観てもらおうという活動を行なっています。同時代の作家たちです。このニュースに、本人に登場してもらえると期待しています。パブリック・スペースが大きくなったことも、今回のリニューアルの特徴です。館内を横切って、東西に往来できるようになりました。(新型コロナウイルス対策のため、現在は残念ながら、西玄関からしか入れません。)カフェ、ショップができ、中央の「大陳列室」がロビー空間である「中央ホール」、北回廊の中庭が室内化された「光の広間」になり、小川治兵衛が関わったとされる日本庭園を囲む縁側的なロビーが加えられ、そして中央の東側2階の、長い間倉庫として使われていたすばらしい空間が、「談話室」という名の「ラーニング」の拠点として生まれ変わりました。そんな新たな空間で起きるさまざまなことも、このニュースで紹介できたら、と思っています。

末長く、よろしく願います。

### 昭和から令和へ 瑠璃の浄土覚書

杉本博司 | 写真家、美術作家



### オモイデ、ボロボロ

森村泰昌 | 美術家



撮影：福永一夫

### 京都市京セラ美術館の リニューアルオープンに 際して

島田康寛 | 美術評論家



昭和8年に昭和天皇の即位を記念して建てられたこの美術館は、令和2年になってリニューアルオープンを果たしました。この建物は激動の時代を見続けてきました。昭和恐慌に生まれ、軍靴の足音を聞き、空襲警報に怯え、敗戦の悲哀と占領の苦渋を味わい、復興に励み、経済アニマルと蔑まれながらもバブルに踊り、そして弾け、ここ京都だけは戦火を逃れ旧態然として、国体さえ護持されたかのように建物はいまだに佇んでいます。私は新館の柿落とし展を委託され「瑠璃の浄土」を用意しました。近代が誅殺しようとしている古来からの日本人の死生観を、アートの姿を借りて提示してみようと思ったからです。しかし私の意図は容易に裏切られました。浄土を思い出すまでもなく、京都は中世や古代に描かれたような疫病の巷と化したのです。皮肉なことに3月の開館予定日に合わせるように緊急事態宣言が発令されました。私は人っ子一人いない私の瑠璃の浄土に佇み、やはり浄土には生身の人は入ってはならないのだと思うばかりでした。

キョウトシビ(注1)は、とにかくボロボロで、なかなか笑える風情があった。ボロボロは少々みっともない。けどすこしくらいなら汚しても大目にみてもらえるという、あるまじきイタヅラ心が刺激される。だからちょっと解放された気分になれる。私はその昔、キョウゲイ(注2)の学生だった。毎年進級制作展があり、4回生だとそれが卒業制作展となった。でもいずれの場合にも変わりなく、それはキョウトシビで開催された。学生のやることだから、スツチャカメツチャカだが、どこか必死なところもあって、ここぞとばかり大胆な展示を試みるひともいた。シビ(注3)がピカピカだったら、緊張してこじんまりした展示になってしまっていたと思う。ああそうだった、シビの名物だった京都アンパン(注4)、あの好きなことはなんでもしてください的な展覧会も、会場がボロボロだったから許されたのだろう。キョウトシキョウセラも早くボロボロにならないかな。今はまだ、ボジョレー・ヌーヴォーな感じで、ちょっとあつかいにくいから。

注1 キョウトシビ…京都市美術館の略称。シビ(注3)は、これをさらに短くしたものだ。

注2 キョウゲイ…京都市立芸術大学の略称。

注4 京都アンパン…京都アンデパンダン展の略称。京都市美術館で1955年から1991年まで 続けられた、無審査による展覧会。

京都市京セラ美術館のリニューアルオープンおよび『京都市京セラ美術館ニュース』第1号発刊おめでとうございます。この機会に、京都市京セラ美術館への率直な思いを書きたいと思います。美術館は美術品等の所蔵品である「もの」、館長、学芸員、事務職員などの「人」、展示室や収蔵庫、事務室等を含む建築空間としての「器」、活動の基本姿勢や運営方針を支えるべき「理念」の四つの要素を機軸として成り立っています。これらの要素はどれを優先すると言うのではなく、対等でなければなりません。そして、これらの要素によって活発な運営が行われるために背後で支えるのは人が円滑に快く働けるために構成された「組織」と安心して積極的な活動を展開できる潤沢な「資金」です。リニューアルに伴い京都市京セラ美術館では「器」が整備され、「理念」が成文化されましたが、「もの」の充実はまだこれからであり、「人」のうち特に学芸員の数は新しい年度を迎えても増えそうにない気配です。しかし、美術館が研究機関でもあることを忘れず、博物館法が示すこの美術館にふさわしい学芸員数を揃えなければなりません。「組織」についてはよくは分かりませんが、「資金」についてはお蔭で2017年度から購入予算が増額されました。しかしまだまだ充分とは言えません。こうした現状は、90年近い歴史を持つ美術館として決して誇れるものではないでしょう。確か運営方針として世界に羽ばたく美術館を目指すという項目があったと記憶します。この思いが空文化しないことを期待します。